いわて国体 選手強化の取組

岩手県ホッケー協会　強化担当　近江　隆久

和歌山国体では、成年男女・少年男女の４種別すべてで出場を果たすことができた。昨年度は、プレーオフ制度のため、成年男女が代表決定戦で近畿代表に敗れ、出場することができず、２年ぶりの全種別出場であった。今回の国体では、特にも女子の活躍がめざましく、総合で124点を獲得し、本県の天皇杯順位アップに大きく貢献できたと思う。この要因として、積極的な県外遠征があげられる。ホッケー競技の場合、全国の競技人口が少ないため、もともと県内での練習試合というものが組めない。必然的に県外に出なければ対戦相手がいないという状況があった。また、東北で常にトップの座にあったため、格上の相手を求めて、関東・関西まで足を伸ばさなければならない環境にもあった。簡単に行ける距離ではないため、バスでの車中泊を当然のように行っている。朝方、現地に着いて十分な睡眠を取れたわけでもないのに、相手チームと試合をする。もちろんコンディションも十分でない。ただ、そのような状況においても、チームの目的を明確にして、この試合でどのようなことをすればよいのか、相手の出方に対してどのように対応すればよいのか、等々を意識して試合に臨む。苦しくても、ただ試合をこなせばいいということは決してしない。貴重な実戦であることを意識して試合をする。このようなことを、年に何回も行ってきていることが、強化に結びついているのではないだろうか。

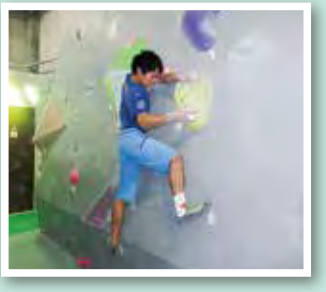
いわて国体では、岩手県のホッケーには総合優勝の期待がかけられると思うので、ぜひ総合優勝し、ホッケー王国岩手を掲げられるよう、努力していく所存です。

岩手県フェンシング協会　競技強化責任者　田村　明

今年度行われた和歌山国体で、本県フェンシング競技は少年女子が3位入賞、成年女子がサーブル4位・フルーレ7位入賞、成年男子フルーレも入賞まであと一歩のベスト16という結果を残した。過去5年間、本県フェンシング競技の国体入賞が無かったことを考えると、皇后杯3位・天皇杯6位の成績は大躍進と言えよう。

その要因として、選手・監督の努力はもちろん、成年においては実績ある選手の獲得がうまくいっていること、少年においては岩手国体を見据えた10年前からの強化が実を結びつつあることが挙げられる。また、県スポーツ健康課やトレーナーによる協力体制が整っていること、さらには試合会場で県や一関市実行委員会の方々の大声援をいただいたことなど、多くの方々に支えていただいた「チーム岩手」として試合に臨めたことが、好成績の要因であると思う。

今後は、本番である岩手国体に向けてさらなる強化が必要である。そのためには選手が集中して練習に打ち込める環境作りのために、今まで以上に強化スタッフが一枚岩となることが必要不可欠である。また、成年選手にも少年選手の強化に協力してもらうなど、種別を越えた良好なチームワークも築いていきたいと考えている。さらなる進化を求めて、常にチャレンジャー精神を持って強化に邁進していく覚悟である。その上で、岩手国体では和歌山国体を上回る好成績を収めることで、県民の皆様への恩返しとしたい。

岩手県山岳協会　選手強化部長　畠山　晃

岩手国体に向けたジュニアの育成が始まり10年が経過した。2015年はこの中で育った選手達が、全国そして世界へと大きく羽ばたいた記念すべき年となった。先般の「わかやま国体」において山内響（盛岡南2年）・中島大智（花巻中3年）組がボルダリング5位・リード6位の成績を残し、岩手国体の上位入賞に向け確実なステップを刻むとともに、山内は高校クライミング選手権3位など、個人でも世界を視野に入れた活躍を繰り広げた。さらに、伊藤ふたば（松園中1年）がユースCにおいて日本代表となり12月のアジア選手権（マレーシア大会）においてリード・ボルダリング2種目で優勝する快挙を成し遂げた。スポーツクライミングは2020年東京オリンピックの追加種目として準備が進められており、これらユース選手達の「世界」を見据えた活躍は、岩手に大きな「夢と希望」もたらす可能性がある。そんななか1月のボルダリングジャパンカップにおいて今度は、成年女子の金澤・立花組（東京国体入賞）が代表権を獲得、4月に日本で行われるワールドカップに揃って出場することが決まった。女子のワールドカップ選手の誕生も本県初であり、これもまた岩手国体に大きな弾みをつけるものと考える。これら選手達の急成長は選手個人の試行錯誤の積み上げとともに、関係当局の御支援のもと「施設整備」と「トレーニング方法の改善」が両輪で進み、選手達を強く後押ししたため考えられる。岩手国体まで約半年、これらをさらに全力で磨き、県選手団として団結し、最後の高みを目指したい。